

## 肉の罪はそんなに重くない！？

大ローマ布教所長

山口 英雄 Hideo Yamaguchi

ローマ法王フランチェスコは、第35回目の司牧の旅を成し遂げた。2021年12月の初め、キプロス島、ギリシャの2カ所を訪れ、それぞれミサをあげ、またその際に現実世界の改善が必要であることについても話をした。ローマに戻る飛行機の中で、記者団との恒例のインタビューが行われたが、法王はある記者の問いかけに重大な内容の返事をしている。それは罪の問題についてである。

法王がギリシャに向かう直前、フランスのパリで大司教ミシェル・オプティ (Michel Aupetit) が肉の罪を犯したことが発覚して非難が巻き起こり、オプティは大司教を辞した。彼の辞職を法王は受理するしかなかった。この件に関して、記者が鋭く質問し、そのために、法王のさらなる一歩踏み込んだ回答が引き出されたのだ。法王は次のように答えた。

彼、オプティは一体何をしたのでしょうか。辞任するような酷いことをしたのですか。彼はどうして非難されるのでしょうか。庶民の声といっても、しよせんそれは井戸端会議のようなものです。実際に彼は、秘書にほんの少しマッサージをしたくらいだという。これが罪と言えるのでしょうか。それより問題なのは、人々が天使のような顔をして非難することです。私たち人間は罪あるものです。私も罪人です。私たちの教会は罪あるものを敬い、さらには私を法王にも選んでいます。そもそも、聖ペテロだって罪人でありました。オプティの辞任は真実の裁きによるものではなく、偽善者の裁きによるものです。しかし、そのために、私は彼の辞任を認めたのです。

法王は、肉の罪は最大の罪ではないと飛行機の中でのインタビューで答えている。だが一般の人は、この罪こそ最大の罪と考えてきたものだ。道徳家は異口同音に、性的罪は常に最大の罪の一つであると声を荒げていた。しかし、最近の悪の分類からすれば、何かが見直されているようだ。法王フランチェスコは、法王として初めてそれについて語ったのだ。現法王にとって、一番大きな罪は「傲慢さ」と「憎しみ」であるという。さらに、「武器の売買」「戦争」「他人の扱い方」「マフィア組織に属すること」などを挙げている。一時は、「性的小児愛症」が大いに非難されていた。

しかし、今や「肉」の罪はそんなに重いものではないという。肉の罪を犯しても神は許してくださると言うのである。性への恐れは、ここ数世紀の間は大きなものだった。ダンテは、神曲の「地獄篇」の中で、肉の罪のことを「わいせつなもの」と規定しているが、最大の罪とは定義していない。ダンテによる罪の分類は、「大食」「けち」「浪費」「癩癩持ち」「怠惰」「異端者」「乱暴者」「詐欺者」「裏切り者」となっている。これを見ても、法王フランチェスコはダンテの思想に戻っているようだ。さらに、スコラ哲学やトマス・アキナスの考えに戻っているようだ。長いカソリックの歴史では、性的罪は「告白」の大きな部分を占めてきたはずだが……。

## キリスト教用語の一般的使用

2021年11月末、EU 倫理委員会は、クリスマス控えたこの時期、EU 関係の文書では常にキリスト教用語が多く出

てくるので、これらの言葉の使用は「差別用語」になるから、なるべく使わない方がよいという通達を出した。EU 住民誰もがキリスト教徒だというわけではない。キリスト教徒以外の人々にとっては、この時期、「イエスの誕生」とかクリスマスというキリスト教関係の事柄は無縁であるというのだ。だから、人々を差別しないようにキリスト教用語を使わない方がよいというのが、その根底にある考えだ。しかし、この報道に対しては反対の声が高く、結局のところこの通達は実効性のないものとなった。このことも、法王と記者との飛行機の中でのインタビューで話題になった。法王は次のように答えた。

その問題は全くの時代錯誤です。歴史上、ナポレオンやナチス、また共産主義の独断的思想があるでしょう。今日は水で薄められた世俗化があるばかりです。それらは歴史の中で結局、しばんでしまいました。EU は理想主義者の言葉ばかりをとりあげるべきではありません。その馬鹿げた考えは、EU を分断し破壊してしまうでしょう。EU は個々の国の成り立ち、そのバックグラウンド尊重する必要があります。民主主義に対しては、今日二つの危険性があります。一つはポピュリズムです。それは今、世界のあちこちで、爪を磨いている。ポピュリズムの最大のものは、前世紀のナチズムです。私たちは、左翼とか右翼とかは言いませんが、ポピュリズムに便乗させられてはなりません。もう一つは、その国の価値あるものを蔑ろにしないことです。それは、文化的、経済的、社会的動向を損なうべきではないということです。

## キプロス、ギリシャへの司牧の旅

法王フランチェスコはキプロス島に12月2日に到着するや、ただちにミサを行った。キプロスはヨーロッパの東の門であり、中東にとっては西の門である。キプロスは西の文化と東の文化の交わる場所だ。キプロスはトルコによって、北半分はトルコ領、南半分はギリシャ領になってしまった。島在住の50人の難民が法王の力によって、イタリアに移住するように決まっている。この出来事は象徴的である。それはEUの国々の目を覚ますことを目指している。ヨーロッパにおいては、「安全性」と「堅牢性」が確立されるべきである。これについて、政治家だけではなく、またレバノンのカソリック信者、またラテンのカソリック信者に話していく必要がある。我々の教会には壁はなく、我々の教会は開かれていて、誰もが神の寵愛によって歓迎される、そこには何らの差別はないというのが法王の考えだ。

法王は、2016年にギリシャ滞在中にトルコに囲まれた、ギリシャ領のレスボス島にも行った。今回もそこに赴いた。そこは難民が暮らしている島だ。難民問題は、世界的に大きな問題の一つである。彼らの未来は自分自身の問題であり、自分が全き存在であれば心も晴れやかになると法王は言う。ローマの聖エジディオ共同体の働きで、すでに200人がローマに到着し、今後さらに80人がローマに来る予定だ。そのほかに、キプロス島からも50人の難民が到着予定である。